

感謝と喜びの賛歌

頭書(表題)は「賛歌」「感謝の捧げもののために」となっている。歌の初行はその歌を印象づける。「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。」喜び、賛美、感謝の歌を主なる神に向かって歓呼せよ！個人的、社会的悲劇、不条理、理不尽な出来事の中で、絶望することは容易であろう。また、他方、浮ついた喜びもあろう。しかし、厳しい現実の中でこそ信仰者は主にある喜び、賛美、感謝の歌を歌う。それにしても、この詩は、陰りのない明朗、清明な歌である！礼拝における司式者と聖歌隊、あるいは、会衆の交唱のような形を取っている。4つの行から構成されている。最初の3行は賛美への呼び掛けであり、(第2行は賛美、礼拝の対象を現わす信仰告白であるが)最後の行は信仰の応答である。

1. 全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ

「喜び」という名詞が用いられているのではなく、大きな叫びをあげる、戦いの雄たけびや喜び、楽器で言えばトランペットのような音量である。呼び掛けは「全地よ」である。狭い民族主義を超えている。人は家族、種族、民族、クニ？ 何にアイデンティティを持つのだろうか？ 何に自分を重ね合わせるのか？ そのことで、ルワンダへのミッションボランティアの佐々木和之さんと少しお話しした。ルワンダにおけるツチ族とフツ族、被害者と加害者の葛藤は神における和解の愛による結びつきによって癒される。2023年10月7日ハマスの戦闘行為によって始まったイスラエルとパレスチナとの戦いも(実は1940年代後半から)結局自己同一性の問題であろう。BWAとNCC(劉先生の中文訳あり)の声明文を参照のこと。

2. 喜び祝い、主に仕え、喜び歌って御前に進み出よ

ここで「喜び」は元は輝くという意味)である。「喜びをもって」ヤハウエに奉仕する('abad)、働くこと、仕えること、礼拝することが奨められている。人の基本的働きは主に仕えること、奉仕すること、礼拝すること。さらに、「歌をもって」彼(主)の顔=臨在の前に来い。とにかく主の顔の前に来る、行くことが基本である。

3. 知れ、主こそ神である (dā'ū kī- Yahweh hū 'lōhīm 3節前半)

「主、彼こそ神である」。イスラエルの基本的信仰告白。「彼」Hūによる強調文。「知れ」：これは全人的認識の課題である。わたしたちは何を、誰を知っているのだろうか？「人間は生来的に多神教的である。」(メイズ)ヤハウエを唯一の王、主とすることは、この世界のすべての権力を相対化する政治的選択でもある。主を礼拝すること自体が政治的なのである。(ヨルダー)

4. 主は創造主(3節)、わたしたちは彼の所有物、その民、牧場の羊

「主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民/主に養われる羊の群れ。」ここでは「創造する」(バーラー)ではなく、Make(アーサー)ご用いられている。彼が、われわれではなく、またこの世の支配者たちではなく、彼こそがわれわれを造られた。(われわれは)彼の民、彼の牧場の羊(冠詞付き the sheep)である。神によるイスラエルの選びの信仰である。人はだれに属するのか？ マルコ3:21「身内の人たち」=彼が属する者たち、彼に属する者たち)イエスは身内のものなのか神のもの

なのか？あるいは「悪霊のもの」なのかというまさに自己同一性の問いである。われわれは主のものである！

5. 礼拝者の姿：感謝、賛美の歌を歌いつつ神殿に入る（4節）

「入れ」、「来い」（2節と同じ表現）「感謝をもって」彼の（神殿の）の門（複数形）に、彼の庭（複数形）に、また、「賛美をもって」入れ。礼拝とは神のみ前に「来ること」「行くこと」である。

礼拝者は感謝と賛美をもって神殿に入る。感謝とは与えられたもの、こと(gifts)に感謝するが、賛美とは与え主そのものに(giver)に捧げられる。(J. Moltmann) 感謝と喜びは人間からではなく、神に由来する感謝と喜びであり、また、神への、神に向かう感謝と喜びである。

6. 主は恵み深く、慈しみはとこしえに/主の真実は代々に及ぶ

なぜなら、ヤハウエはとこしえに良いお方(good)であり、親切であるから。「トーブ」=Goodの持つ意味深さを黙想しよう。さらに、主は、代から代にわたり、(契約に)忠実、真実であられる。ここでは、hasdōw が用いられている。Hesedは親切、憐れみ深いことを意味しており、「ハシディーム」は紀元前2世紀頃、アンティオコス4世エピファネスのヘレニズム化に反対した「敬虔な人びと」を意味しており、マカバイオスなどがこの集団の中にいたが、ここでは、主なる神自身がイスラエルと結んだ契約に忠実、真実である、彼のハスドゥが代々続くようにと祈られている。わたしたちの祈りは自分たちや家族、教会の平安だけでなく、主なる神のご栄光が輝き、彼の良さと契約への真実が永続するようにとの祈りでなくてはならない。

詩篇93編から始まる、主は王であるという一連の歌はこれで終わる。